和歌雜詠

和書門 類
二五五三三 號
六八 函
七 架
七 冊

内閣文庫
和書 類
二五五三三 號
七 冊
五 架
二〇 函

内閣文庫		
番號	和 25533	
冊數	7（ 6）	
函號	201	64

国立公文書館
National Archives of Japan

下蔭集巻六

雜歌上畧目録

天 一丁
星 一丁
風 題二 一丁
雲 題七 二丁
雨 題七 三丁
晴 四丁
朝 四丁
夕 題一 四丁
山 題九 五丁六丁
杣 六丁
嵓 七丁

日 一丁
月 題一 一丁
嵐 題一 一丁
虹 二丁
烟 題六 四丁
暁 四丁
晝 四丁
燈 題五 五丁
山ひこ 六丁
山路 題一 六丁
洞 七丁

巖 題一 七丁
行路 七丁
水 題六 八丁
瀧 題六 九丁
海 題十 十丁十一丁
浦 題三 十一丁
湊 十二丁
橋 十二丁
沼 十二丁
國 十二丁
故郷 題三 十三丁
閑居 題五 十四丁
餞別 題十五 十五丁十六丁

野 題一 七丁
關 題五 七丁八丁
滴 八丁
河 題三 十丁
湖 十一丁
嶋 題一 十二丁
渡 題二 十二丁
水郷 十二丁
池 十二丁
市 題一 十三丁
仙家 十三丁
寺 題三 十四丁
羇旅 題廿三 自十六丁至十八丁

旅宿 題五 十九丁
古戦場 十九丁
山家 題十九 自廿丁至廿二丁
山館 二十二丁
苔 題五 二十三丁
篠 題一 二十四丁
浜ゆふ 二十四丁
竹 題六 二十五丁
杉 題二 二十六丁
柴 二十七丁

旅泊 題三 十九丁
山里 二十丁
山居 二十二丁
田家 題四 廿二丁廿三丁
芝 二十三丁
蘆 題一 二十四丁
瓜 二十四丁
松 題十六 二十五丁二十六丁
榊 二十七丁
梨 二十七丁

国立公文書館
National Archives of Japan

下蔭集巻第六

雑歌上

○天

富田金蔵永世

天の川そのみなかみをたつぬれは星のやとりの雫なりけり

○日

橘茂三冬照

たちかへる雄神のむかしのみつきをそ今もあふつる朝日かけかな

○星

大信寺寶山

一かたのうつ秋かけむてつほしきらめく光やとやしるらん

○月

於渡和寺唯乗

心しあるみる人うつる世中にかゝりて照る月のうきわれ

小西藤左衛長房

月ことに月をむかしの雨けよかくれと見え始りてうつりゆく

閏月のこゝろを

大谷まさ光子

米と月とゆるなくてふる月とらへつらそらよふうろ山月ら

○風　村尾穀篤

めぐみえぬ風のはやいつれも松と吹そるらうろ拙寸ふ
吹つらせ枝となつるぬみ堂うる夜のたえ八子くとこれまて

坂口平四郎源宣弘

平らきうのむまたれそうゆきてて枝となうらぬ山のの風

薄暮松風　平原平元道

むらつら松つく風のまにて田むそうら西よ日そくれやらん

海邊夕風　橋ふ野子

なうせうあーのうまのあまよね吹ぞうしてうしのまつ岩

○嵐　橋本亀松寛洒

ゐ松よりおろ風嵐ふあさま山ふりのさとや打けつうらん

嵐破夢　橘ゆめて法

ゆふふつまうさ雲のつらをえぞりしやむさえ八ちらの山をせ

○雲　石田喜右衛正壽

松きつる袖のうとてえる松箱るえとふろうねよそくらむ

落着雲　そうそらの寛隠

照月よいとうれわくきはいめてでくるうとめゆうしとそえん

峯後曙雲　外山菴きよ風

峯の花してのとほてれゆらのよあらぬ若松の山のむらうも

海雲暁雲　橘直芳

あつ出二尾のさとい八ぞくらそ沖ら吹ゐもとこゆのゆを

山雲　等光寺静渠

まきうせ花くやえまつうの山桔るはつにうはしらうも

山路雲　市川季村

ちくつのあうよなるめ雨きうつとゆうてさそのめるあるのの山みち

かよふへき道こそ人めたえつゝわけて雲こゆる山路の峯のかけ道
松本師興

夜雨
きゝわふる軒のしつくのたえまなくとひくる夜半のあらしをかこつも
加藤幸七真章

秋雨といふことを
秋の雨ふりやまぬ庭の白菊ハうつろひぬる一つの色やこゝろ
権付静景

○虹のうたよみけるとき
夕つけのくもゐにかゝれる虹のすゑみえかくれつゝのかれゆく
富田外記千稲

○秋雨
秋のはれ空うつる雨はまさけハ一葉の雨にも袖をぬれたる
田邊東和

雨中思
ますらをも雨のつれ〳〵おもふにはひとへにこふる人のうへを
大信寺寛山

雨中待友
まちわひし折しもふる雨に問こぬ友の方やうらみもせん
小佐野清七豊

五十番歌合しくるゝ山中雨といふことを
かきくもる雨ふる比のつゆけくにきられハ袖ちらふ人こそあれ
橋本ちかえ

杉むらのこすゑに雨の音きゝて峯ふきこゆるいとふかきにける
井上国子

深山雨
ちるもさらにふりそゝくはけしさに山の庵の雨ぞゆかしきハ
吉田清兵衛秋至

関路雨
雨ふれハ行もかへるも逢坂の杉の下にてやすらひぞする
和樹舎豊

ふりしきる夕立の雨のあとしるや関路こえゆく人の衣手
吉田宗秋

千とせていく世よろつむやくのせき路をくらく村雨そふる

田家雨　大佐寺賢山

ふる雨にぬれもやせんと篠竹のへたてもよはき山田の庵

○烟　明田濱子

にきはへる民のかまとにゆふけふりやふしもやしまた烟さえん

釣烟　圓照寺宣道子

よるもこのうらわてけふりたえす又ひとりそ釣人のたくけふりかな

宗恩寺のあるし公甫

沖遠くほのみえわたる釣舟のともしの影かすかにちらすらん

夕烟　松本師興

山ふかくきこのさとへもきえはてぬ夕のけふりたちのほりけり

浦烟　星野三六貞暉

釣するゆふくつる烟にあまの住む浦のとまやのかたもみえけり

吉田楽斎宣秋

風あらきなるみの浦にやくしほの烟もそらにたなひきにける

小笠原ゆき子

せちかる人やあるらんきよみの浦きよくのけふりたえまなくれに

塩屋烟　はした宣浮

きよみのうしやあまれこときとやくしほのけふりも波にかくれぬはなし

彦根孝純

すむおやくあまの苫やも浦きりてけふりそ立る八波もあらくさに

小川持寿

よる浪とちかひのきてやしほのけふりや沖にたちのほるらん

民戸烟　鈴木保章

にきはひやまくてのありてえてなからせむりよかける民のけふりを

遠村烟　橋允熙

まつかせにめさませともまこときく夕かはれ

○晴

てるひにも霧はれて世の人に心うつの海ちかくなりなし　よみ人しらす

○暁

有明の月の光れきやつさに暁やつらき名のみならぬもの　しほみ田永世

○朝

鶏のこゑに霜をみてるる一むしやかやとにほひふくなりけん　豊原穀篤

○晝

中空にのぼるひかげとめあてゝ涼山の人はいつしとしるらむ

○夕

夕かけちらしてちるはなさちるあはれとこそきく入相のかね

黄昏　大佐寺寛山

山もとにてさしてあふめはなきくもりくれなるきさかし

○深夜燈

時もやゝふかゝりけるの影そえてあかぬはかなきまつよりも

旅宿燈　釈蓮院寛風

ともしひも短やのきり火かきたてゝひかるきくまつのこゑを

暁更灯　田邊貴和

なまさへとふきね覚の枕よこほそくものゝ深灯火

竹間燈　吉田寛秋

くれ竹のうちかけのより火もちらふの風そ人さそひやる

燭影浮水　伴ま雄

さく波をうせうれしとより火のうつるのうきまんともなし　小佐野伊一の

○山

松さへうるをみて山を時雨しもぬれくて心うくれ　富田永世

ちよやまてちきりてつくれとふもとにみえつゆるかしの芝山

曙山　村尾金助敦篤

中まろしゆふけみえてうつりきえそねはかの峰横雲の空

暁山　筒見三郎左衛門貞興

おりたちあかれきちやふみえてなかねくさき山のはのさと

大作寺寶山

横雲のいはつくさしぬれてのはのしられぬまにあけの月をのこす秋のよ

半山無夕陽とふ事を

夕ひかけ山のあさきにうつりてふもとはくらき松のむら立　長野光門

富士山

千尋あるふもとの雲のたえまなくふもとのそらもしらぬふしのしらゆき

みな月の比ふしの山をみて　山森政八清服

みな月のあつさもしらぬ国もさこそみゆらめふしの山かれ

猪股山　よみ人しらず

えみ代のさかえをみつけと苔むしてまたきさまなる山

二荒山にゆきて　箕根義巡

うきをしはけんてしてあつけなきのすゝめる月かれ

秋をはてゝ山と　松本師興

おくれはなくさめられて月にたへて秋らしまての山

冬山のこゝろを　富田永安

あつかねねやまてきるさむる人をえをかさふみよしの山

○山ひこ　はらしの寛済

むかしとの山のあさからあひてねかうをや木の板もそのまゝつゝん

○松山　園照寺兼敬

世のまゝもたえぬおくしさむかしてなへきまつをなくて松人　同寛隆子

うち来ひくれなゐのつゝじ今さして松山人や春をしるらん

清徳寺沙弥

山寺のかねもふかくきこゆや松まとふくれの声

橘ゆき子

山川もかけて流るゝ清代の松やかるゝ行末とをくにけへる

○山越

松まへく高き尾上の道こえてみれハ麓も山のかけ道

鈴木保章

山路梯

立わかれつゝねきしはあやうき八瀬にゆらく山のかけはし

加藤生幸

ひとけしあるのかけしかくすてもかゝるそみの道にしるへ

平原文造

小夜ふけて越ゆる足代の梯あやふみ

富田永世

なべて世をわたる道さへかよはぬハ山路あやうき谷のかけはし

田邑貴和

○崖

岩のうへをのほれてとほしやまも松のあらしそ松かせのこゑ

豊原穀篤

○洞

仙人のすみなれし岩の六月の光りや涼しのどけしの火

小川持尹

○巌

こゝろまでみな澄む流れあるに日もさゝぬ苔の岩の上に松ぞ立

大信寺寶山

磯巌

あら磯の波にうたれても動かぬ清代の巌やいく千代の道

富田永世

○野

秋まてハ虎とそ見ゆるねや野に照る月に光りてかよふ原

宮城野へ昨日のくさきみえて

みやき野や小萩か露のちらくを吹はらふちるのこる月かけ　嶋方松蔭

○行路

志らかはら見へし野へ八重むくらかき分行山路しるしも　伴尊雄

○関

うれしくも戸さゝぬ御代にあふ坂や関の清水もたえぬなかれも　岡田永世

渓路

波風も静かに月の志らかはの関にさしぬ清代まてよるひとそなき　沙弥満瀏

いにしへをしのふはかりとこふれとさても名のみの関のたそかれ　坂口宣弘

戸さゝしの世をまもるのねてもはなてにかゝりてあかりゆくあかつきの渓　菅光与興瑛

夕関路　沙弥清潮

くれぬるとさむる道の岩か根も駒もつなかてあかつきの渓

名石渓　彦部信有

名のりてこえしよそむくしもよそに人しかゝらしやの関

衣関　関根孝興

ゆきかふ旅のかさね草むすふ旅ね衣の関ハいつれともなし

○山水　小川光房

磯山や松ふく風のしらへよりおとそへてなかるゝ波

澗水　喜多元緒

岩かね清水のおとく枯たる苔をしめてちるもみちかな

谷水音幽　霊巌寺大秀

きこえてや又わかれゆく水のをとに霧たつ谷の底そしらるゝ

深夜水聲　村尾敦篤

谷のしたかは風をさそひてあかつきちかき水のおとかな

名地儀のこゝろを　大僧寺寛山

ゆくとはニうこゑね此世の境とふこゑりてゆる岩垣清水　お観喜院宣敬

○遠水

ふ地とをく久しふくのやまの尾よりおつるあまの門

流水浸雲根　大僧寺寶山

みなかみやくもいつくなるらんたつ雲の中をなかるゝ木曽の谷川

○瀑

音ハして月もおちくる峯の雲それ紙のまろりの新たしつくに　橋本寛浩

○瀧

ゆくいつてきてちるも草よおく清くそのそてしつくるかまほ　奥河内清香

み山木の音もしつくもあつまりていさよふ滝のなかるゝ　沙門雅懃

雨やみてしハしよよ櫻やま中絶よろつ布ひそめの滝　よし田宣秋

しつしつへ冬夜の滝ときこえたれハまろたかくにもちりくる

夜滝のこゝろを　宗固有宣昆子

松風の音もさひしくなる滝のまちる清やあつさひつくはな

山中滝　同あるし公甫

山ふかみくゆふかくて滝つせハ雲よりもまつちりこそ見ゆ　富田利世

山ひめの琴のとなれや松かせもひゝきあひたる滝のしら糸

山中滝音　最勝院法印照海

おくれハ山ふかく入りて音て又きゝつたかやふなれの滝つせ　安穏寺唯泉

滝つきの岩にはつ清よくさされて松かつ風せきまさりけり

深山瀧　市川季村

世のうさをわすれぬ山の落たきつたつ白玉とこそなかれおちけん

天保の四年なる月清風子外山庵にて二百首哥合
しけるに飛瀧音清といふことを

宗本齋庭

岩かねにちりてくたくるしら玉はみなれおつる瀧のしら玉

おなし時　よし田秋主

川の瀬にみえしらんは山深き瀧となりてこそ下にみえくたる

名所瀧　富田永世

みなかみは花のちくら白雪の中よりおつるみなせの瀧

長澤春江

ひとかたにふりてはやまぬ白雪と見えて横川の瀧そおちける

よし田宗秋

名くはしきよしの瀧ハちとせの波をふくみて落そたきる

○河　志倉弘門

すみぬるもみなかみの心をえて世をうち川のなかれはしすむ

富田永世

立かへりいくたひやむすはん石川や花田の峯と見ゆるなかれを

名取川

みなかみの諏訪の海へもこそ行末ハあふさの天の中川

春川のこゝろを　小佐野ゆたか

川そひの柳に隔る桜の花にしきを流すかはらとそ見る

長河似帯　坂口宣弘

山川やおちつるみつもはたむすひてめくる帯とみえてたつ

○海　酒井郁照

世のなかくこそあれわたつみの原あるかへよるなみもみち

小門持尹

青海原こゝしら浪立て石川のなかのやなくとかくらん

富田永世

潮そ浦ふうらわち川のさゝあつまり汐のみちくる海そあやしき

汐干見まゆまで

わたつみの底も春なを見つゝ龍の都もいつてなかりけん

春海を　富岡正美

伊江やまきはさむくれ月はれ貝ひろつしあけ霞む浪のくま

橘宜胤

めぐり渕し沖の小島もはて山もかすみてうけるまそほの

秋海　吉田秋主

いそ山の草木も色濃く秋風としらぬ海明る波の花こそ

海路　曽根孝継

浪あらきさほちをわたる海人よ風ふきそふる命なりけり

遠海のいつはりいとのあきて見れはいかなおもへて沖つ海人

海路船　星野良輝

船かへるきこゆり舟歌ふゑやうみのまたれ霧をしつくみそゆく

海路夕　道光与英

夕されハ船よする近江の都へ見えてきこゆくのうらなみの松風

夕海路　荒照高静河

わたつみの泉も井につれきしの波とはいふ夕ゆれれていくらむ

海路遠　小佐野豊

こゝろしもほやかやいつて伊豆の松浪かも見えぬ沖中ゆけて

海河　柿義夫

なかれてそ同しくるの海に入来てそこのあさ山川のまた

天橋立　小川光房

よもの海やさしくもなる浪の上に月すみわたる天のとしこと

○湖　冨田永世

あふみともきこえぬふねの水の影うく近江の海つく

○妻浦　大岩きよ子

わしほやれ妻の浦をみ海ゆふ入日のかけさむ浪のうへの人これ

名所浦　山藤きよせ

日本みちのくなる姉の身をかくれもゆるゆふべのうく波

風ふけば三保の浦松波こえてあまつ乙女の袖かへしけり　大橋三居

和哥の浦にて　冨田永世

きこえわかの浦松にそれなくしほの山もあかねさす

○鴻　大佐竜寶山

きそえの国のねぎや浪のほとはきつほりあの秋のよの雨

夕陽映嶋　とみ田永世

あられて田鶴も毛衣ほすらむ田蓑の嶋に夕日さしけり

○冬湊　橘直芳

あそくしのかとせの貢つくれて冬そみなと八はうきぬる

○渡　たかしみ寛濱

すみた川舟よりて和入八ともかゝるあそまにわたる

夕渡　せきね孝煕

あよみせ舟さしよすみ浪てゆふしほくれのかけり

○冬関　金子師行

冬関のみすみて継くしの浪と書つれて

きゝわたる浪まくとえてしえてむしのまの浪きくし

名所橋　冨田永世

ゆわたる浪あのはしそ浪なしその名高所の山まあまとても

松かせはおもふ心の波の音もわかぬ天のうきふね

○水郷　　　　　　　　　　三谷貞幸

うれしくもさまのかはる難波人あするかさしもしや世の中

浄念寺念阿

あしまよりさしくる汐をまつほとに月のかくれ秋の川ふね

○沼　　　　　　　　　　中村永世

いつも風ふく流れのうちに引なかれハ波の花そちりける

○池　　　　　　　　　　村尾金助敬篤

岸ちかきみるらんを擲く池のみ風のふきまかる浪

○園　　　　　　　　　　佐橋宣胤

くれなゐ秋の園の花の色もふかくみなれたる大八洲の

さかりしらて　　　　　　岸根孝熙

いつも川まつやたゝみいろもとをそてのゆけりそ園集

○市　　　　　　　　　　沙門淡然

くもの中此人の心知たる市よりもあしきも立浮く世を流

名ぬ市　　　　　　　　　富許後臣

いつ海あるとも西の市やくらてもなく里人

○故郷　　　　　　　　　佐橋宣胤

ふるさとの人もなかれてなつかしの宿を流るゝ人ハうけるよのなかの露

ふる里草　　　　　　　　小佐野豊

秋の野とあれはしる時のそ人の宿に松むしきのむしひとりおきよ

ふる木　　　　　　　　　桂律静景

ぬれる庭の姫松の色をはなれてかはらぬ心

宗円寺以南

うゑおきし小松をいつの世しとしてあれしる庭のあるしそ形

ふる松　　　　　　　　　佐藤千足

うゑおきて言の葉しげれハ松ぞむかしの世をしのぶる
○仙家　　内田永世
まれにとふ人もみえぬ谷の桃の花幾世をかへし久しさ
　　檜住言風
七代まて人をかへりし山中の斧ハくちにしのちもありけり
○ゐしらぬ　　住吉雄
かくれすむ山のおくにもなほと世をとふ人とはおなじこと
○閑居　　田邑貴和
世をいとふ笹のいほりのさびしさにみてしもまでよしとならん
これに又世をきかぬはうき数にかぞへ人ぞそのまどの松風
　　星野貞暉
　　吉田春雄
わか庵ハ人もとひこぬ庭の落葉して世の通路もうつまれにけり

深山閑居　　市川季村
さひしさをまてあるみ山の世かれハ人のかよひゆくたよりなし
　　沙門輝勲
すみなれにし山のくまをもわすれせぬ月さへ人のかけのいとはれ
閑居鳥　　沙門諦善
友とせし松のみとりもちりそめて風のみむかし人をかへし
閑居水　　園照寺寛道子
ゐるとても岩まの水の清くしもこころとまらくすまひなりける
閑居木　　沙門輝勲
とふ人もおもひかへさるわか庵ハ松にゐかよふ風のみそなれ
閑居松　　小佐野ゆきの
わかるみのなからもうすのしとて千代のよろしき松をしる
寺　　平原元道

わしの山てらしし月のかゝやきて佐かえ田まてうつる光りとそみる

山寺　　寧根彦紀

高野山さむつきときに風にきこえひゞける鐘のこゑかれ

古寺花　　沙條清明

うらみよしやさ花よりさきてありとそしる紀らぬのふる寺

吾野昌静河

すつせのさく花のひまし下にきこゆるかねの音かくかのる

菫光寺與璞

古寺鐘　　梅の本唯象院

はつせ山檜原の雲にきこえてあくしにもそこありてこその鐘

あるそうるあまてハまうねあれさそや多くの人知の鐘のね

高橋廣継

大ひえや谷ひえおろしの波にうれは唐さきとまて三井の鐘のね

○あ新院大之吉之の萬岐山之の名残おもひて

庭みふかきそかて　　寧根左巡

むかし紀のまきくるまつりやくへ庭のふちそくへよつまかりき

橋のむかしのいにしへの國よ旅立ちまふとおくる

こゝろハいにしへの信義おもひて旅ねまくらのこゝろうしとされ

やまひそりかたる時そらの大江戸にその名をとおくりて

田むすら梶子

いはのかくすまさいれなきことうらて前の立へてさて清く

坂に宮中ゆかしの古枝よ仰きてとおくる

菫光寺與璞

いさらよ君かゆつて浪のきときとうてむかへる神の人かる

又春人ゆかしなきてちきりて　　菫照寺静河

すみ河のなれる花とかすみても恨みてそ見てきとまさ雨

花ちるころくだる人をおくるとて

大佐寺寶山

梅の花のちるをしたふにまして名残の別をこそをしむ秋子

ふりくらの藤原正枝のもとへ立けるに

伴蒿蹊

いその野やその尾ともこそにしてわかるゝ秋ともるよ

梅の大人わの里とうくらせたまふ時手傳まてしおくり

るみへせて

小佐野ゆふる

ちるとてへだてゝも世のかぎり風よみなをのあれえとよるのふ

池の尾れ名無君れ桐壺のきさらぎあらしありてかへりける

ならぬぞしみて

山藤清風

あそこ又なき人とひきの上ふるれそあれはうかりしうのを

おもしろの里をそへてこゝろゆくるふ

伴蒿蹊

けふ別くわ早やをとむくしのふかくうちとけて思ひくらべよ

七月くらのおくりし君と道の程まてわかるゝとて

田邨梶子

ことのはてはかねゆのまくりとはまてねよつくるあとなつかしむね

おもしろ秋くの初める人をおくる

大谷それよ

うれしくはあすきてのねきて秋にそやうれのくみなふみまかりけん

秋くのかみちのみきふるへよそひてうれしきみな神かり

神無月ふり人の旅立のみをかしも身のうち出れは

澤井芝月

こよひ君かこゝろにしてハ二月ともわかれしむかしのこと

秋のくさ人ゆく人をおくる　松本師輿

ゆくはるの名残はかきりなくてえつゆくてをさそふとりのこゑ
まさしはちんによゆく人をわかるとて
鴨方松蔭
旅の文あまたのうちわかれきてまたも別れのつらき名にたつ
○旅立ちし人の別をとはくる人に
宮所俊臣
よそれても又あふちの峯こえて旅のうさをもわすれかねつゝ
春旅
春の日も旅路は花にわかくさみてをくるてしかて日数へにける
金子雅行
花をみて心のまゝに花は旅わのほとりふりにけり
みちのくにまかる時西行上人のたちしとていくとよ
まれさらは川の峯のわたり清きみのすゑ縄にて
葛飾夏雄
亀方松蔭
梅かゝる清き花影のとまりし人をたつぬるかな
夏旅
たひ人は風のまにまにわけゆきて苔の山路をこえてぬく
東の旅にありける此国の草をわけてわかそてしのふ
まつかつらにほふかたみにてやける
坂田永世
なつやまのとしなつかしき花のにほひの露やこけの露
不動院新園にて行のなかにおきてあかしける
坂口宗弘
みやこまてゆかよひてまつ人にとふ旅にてものを
母衛之
秋旅
旅まくらひとり月の清き宿やこゝろのうへにおもはね
小佐野豊

月前旅　　橋冬照

つらきかとおもひてこそねめいかならん月をしらでよふく旅ねにて

月羇中友　　中田永世

むかし別れし月を友としてこゆるさやの中山

山旅　　大橋三居

こえしとてやすらはずしてある山の岩根の床のくるしみていくさん

さくらんかり狭衣の中山をこゆとて　　中田永世

ゆきかよふあかれしつらさの道のさやの中山こゆるさむさ

伊香保へゆあみにまかりけるに子持山といふ山

ありけれはおもふるの事きをかうしなりかれはてかれは　　田中梶子

むかしわれいひつたにゆあみしてまちちの山はおもひつくしてこそ

○羇中関

ゆくすゑのながきよのはるかすみもたへかれるきけ川の世き　　市川季村

郷とてうつりのあはれみえてこえむ□川の□

羇中路　　山川持尹

里ちかくなるやまかげにてこえかへしあるみちの□

海旅　　橋冬照

いさよひの波にしおもひれて遠き海よりも旅衣

海邊旅　　大倍寺寛山

いそこえみやこのうへ浜松のうへなるてゆくも旅衣

羇中海　　小倍野ゆかり

ふるさとをたちてあまの浦枕きなみの磯のなる人まに

羇中雑部　　橋本好里

野路山路いくたひかへるふるさとを思ふ心をさきたてゝ行て

旅中友　沙弥清翁

先たちしおくれし旅をよそにひきつる杖そうれしき旅の友なる

旅行友　山縣清風

しるもしらぬも深くなる身の八別ゆく旅の友そうれしき

旅夜　矢嶋光人

打わかぬ松の葉末に見えぬるは月ねぬる旅のまくら海山

羇中別　市川孝村

行そふも心もとなくおもふかなけふはそのわかれそうかりける

旅にして人とわかるとて　小松のゆきつ

初めてかくて神の森をふり別ゆく旅はけふにけれ

○大江のあふさかむすふのみやこのなかのゝた

志ひてとゝめもせぬ山を八二日みつゆきてみしかのまゝ中なる町

こゝろしてあつまし松の枝をこそ[illegible]　岩掛仲子

旅扇　日下田足穂

行わたる旅のやとりを我もあゆて先おもひてしあすの道かな

京のやとりして　山田永世

みやこにはへる都も我旅ねして我をたのむ人の都をそ思ふ

旅宿夏　高山和助常堅

わらくへうへしなにしけさ君も又旅に出るそちらそかれ

野旅宿　武並池陵

百草のはなへる枕をいとゝしのものかなしさにそらそかれ

海辺旅宿　富岡正義

わらへかけて夏をたかく濱の千鳥をかくて波の音

○旅泊　高山和助常堅

椰子の小舟こゝろはかなくてなかなかのあはれをしらく
よる舟にとまりて　　山佐野豊
山の端に出る影の上秋の浪枕音もなさて見し秋ハいかにか
旅泊舟　　大佐寺宝山
旅ゆして舟にて入江に昔ハよろしと舟あしまたいさやうあし
旅泊波　　富田永也
波の物にふる音とうえやハえてふきものうき浪りくるかちれの乱
○古戦場
そのかみむかしいくさありし野に音して覚えよくもあるまいかも
下総国府の台の古戦場の跡と見てまかりて　　冨岡正美
金子八郎惟行
もののふのなきすゝみまけりとてのこる野寺の跡をたつねき
川中島にてよみける時風にまよひしか乱れハ

そのかみ名のみしありてもとめくハやうやう秋の川かせ　　高山方松庵
○山里
世人のやゝかへてもとめくハやもの見る深山きしの松の音さらけ　　大橋三居
○山家
そむきつるもき世をわすれて見ゆあはれあはれ山の庵の　　富田永也
むつかしきの出来をもろひつゝもるの風のほとをしらる　　志倉紅門
淋しのをしりぬへき世にありていつとも山のおくにかくれ　　岸根孝溯
こゝろもちかくて山さとつれつれるてもうき世の外にあるまね　　王曠寺大秀
山家秋　　田むら梶子

うしと世をすてゝ入ぬる山ゝも松のあはれはなほねきまゝなり

山家夕　沙門輝勲

きのふまてみしも今日八折ならてきこえし山の夕くれ

山家嵐　観寿院宣胤

世のうきもはらてかえぬ谷の戸をとふねてくく山おろしの風

山家雪　最勝院法印恵海

うれしさもむしろたてたれ山ゝ下は新ふかす下の雪のゆきゝに

山家紙　荷見貞典

ほしそらて細を干すよそにてうつろふみち山への里と

うすくこき山のおちくとあつめてもつむわりはくるもみちにし

山家絶　稲垣ちはる

なかくはひとつそすとみし山へたくひれてさそくと思ふとはしみ

山家瀧　やまみや永世

きつうちとおちくへしそ山家八瀧のひゝきにこゝろくほもこう那

山家水　吉田妹女

みやこにはそ世のくもりはちれやそれみてくの山のおくはそむかし

山家清水　宮川亮都

山の井はそめるなかれにくへてさえみつからにこゝろほくは流

山家橋　岡野吉兵衛

ゆくへに山おくの山路もうき世へて人ねかたみのう達さし

山家苔　釋義天

みやまねしその苔にまきむつまて昔のむしろの廣きに山ゝと

山家松　伴蒿雄

はやをそにけりへるむかしの松風そはてしき世のほかよするわか

白石忠知

きゝりて里やかすむらん山住の心をはらす秋の松かせ

山家松老　　権律師静兼

おひけると見る年も経ぬ山住は松とともに老そなりぬれ

山家松風　　法橋源顕庭

いつみせん世のうきことは八のれても出る日ゆるさぬ軒の松風

山家垣　　江沢道敦

かくれかとさしいかりのうみもなく芝のみまもる葉のくみかき

山家隣　　大橋三居

山ふかくたえ世のふる道絶てさるしの竹よとなりとはなし

山家苔　　杏花院宣敬

世をは戸もうねるやまつみ門をもねみやかの苔もみえるらん

山家述懐　　元壽尼

とふ人に心のおくを見すみかの松のたより松の下いほ

山家鳥　　小川持尹

きゝなれしその心や住うしと山鳩さへも友をよふらし

山藤清うせ

世をいとふ家をもすてゝ山ふかくすみけるものをたにゆくなり

○山居　　川辺正邦

世のうきをのかれてこにすむそを世のうき萬こそまたのかれ

○山館雨　　権律師寿海

山ふかみたまもかよはぬ霞をも雨の小休みわけの山もなし

○田家　　よみ人しらす

うゑつけし門田のいねをかりとりて早も風よふゑいてねはもなし

志倉弘門

夕日さす門田のかりほにかへるおちて稲葉の中に入まかるらん

田家鴫　　津田千畝

波のあせ千波の田居となりはてゝ秋のゝこゑまよひつくつゆかな

江沢道徹

ふもと田のいなかりよ細くなりかゝや鳥根ふのころ秋にせん

沙弥満湖

すゝはら庭にうつれたる水のこゑ波くゝみ中の春をとりかな

坂口宣弘

引かゆみしめとせかれふれていちかりとむすひ山田のうちまし

田家綴

鈴木高明

吹とめくむ見まみせそや山田の門田まつく民の今かなを

霊巌寺大秀

ほふりてね門田の秋のふもとねかよひの綴をそ見えて

吉村永達

田家鳥

くれかなれてやくほし村きの門田秋をねうらしまぬかに

田家祝

大橋之居

田の面に井くゝてかけしかよへかみせるや田の秋なりのつを

田家秋祝

千田清英

秋の田れ民のうまの心はつて蔵の庭のあやかりかな

菖田永世

○苔

むしろひろふあくまりして傳山苔の衣をそらうかな

高倉紀門

子きそ苔れかくそはらひちう露か岩根のまくそとしにれを

山苔

富田永世

みつしの苔根つくねの苔邑花のしらねへうしにきまのし肌

幽径苔

清徳寺海湖

苔むしとくし山きゝの道をしてとちうすれ苔のみちかな

山巖苔

関田浪人

あさきとめかれてや流れし苔ころもかりていそめとまゐらせし色

三座 英勝

ちりやとり川波くつきしのいそわにて苔むすまでもあらしとおもふ

巌上苔

大谷 忠あるま

打よする波にもくちぬ苔ころもいく代かさねていそわなるらん

苔為石衣

坂口 宣弘

かくれてもみえしやくちて岩の苔まとひのなれ苔とやならん

明田 成美

みちのくのいそのまはらの苔や衣のかわりとなるらん

○路芝

桜井 宗風

志らぬへの道芝くさの露けさを行かふ人そしらぬまゝなる

○篠

沙門 孫勤

おもふまゝ篠の上葉もかくやまた露まとふ野辺のまゝに

岡篠

金子八郎 怡行

ふもと野の岡辺の篠にさやくれし風すゝしけれ月の原

田邑 長人 和

夕附日さすやもろもろの岡の辺に見えつゝとみの篠の露

○濱辺芦

園照高 富道子

難波の浦の濱辺やみちしほにたちかくれゆくあしのむら立

芙照高 静阿

露むすふみしかきあしの葉末にも秋のゆふへを知らする風

芙光高 真瑛

風わたる濱への芦の穂末にもしくれてかよふ秋のくれかな

○濱木綿

西田 永世

みくまのゝ浦の濱ゆふ夕風にさそはれかへる舟のゆくゑ

○瓜

武井 藤好

ふしみえやまのさとの庵つくりおのつからきくそもたれ
富田永世

○竹

よ竹なるふしの竹もむかしなれハ葉分の風もなかりけのみ
竹不改色
鈴木保章

さく花もちりぬるのちも呉竹のみとりの色そかはらさりし
竹風如雨
富岡正義

ぬる夢のやとにやれ夜もすから竹の葉しとゝ雨ふるかへて
窓前竹
竹孫源昭

ねさめして雨のおときく窓の外吹あらしの竹ものかなしき
中みつ永世

おくらるの竹もちおとりさやかにしてたくはふ窓のいそとりしけれ
窓前竹
手田清英

むすひ師の庵とてすみかれまくらもとさらなるの窓まてたゝくれ竹

かきこめる窓の内にもくれ竹のうは葉ふみけて時さそきたれ
橋冬照
雀群竹
富田なつ世

ねくらとも村竹のへくおけりさむれりのいくを出しつゝみ
遠村竹
杉岡安清

たとへとそふるなりまた風をきゝとえてまつまた竹のおと聞
中みつ永世

○松

くるをつても老せさる色を住吉のわまわれとくとハ松をいつら
武井信好
遠山松

やまみえねかれかたかくもかれつゝかつはゆかるあらの山まつ
大塚某
巌松

吹さる風の音にそれそたゝやまの松の元そなほ松はえてもとかまり
酒井頼照

歌のみちかはらぬためしとやいく代をふるむろの老松

濱島輔長

夕附日かたふく峰の松の葉にけふもつもれる岩の上の雪

明田浦子

谷松久

谷のくれなゐ年ふりにけり老松の人しれすしてかくや久しき

八木橋應恵

海邊松

浜の浪よせくる岸にかゝる松かねよくみゆる波のうへにこそ

佐橋源凱庭

名江松

よろつ代をへてもかはらぬ江の松にかゝる浪の音のさや

富田永世

うゑてみしいく世へぬらむ関のとにたてるしるしの峯の松

松風

小林永清

世の中のほかにきこゆる松の音をさらぬにもをしむらむ

隔音松風

吉田秋臣

夜をこめて松の音のみそ世の中にきこゆなる

松風調琴

橘冬照

しらへあはせし松の音のこゑにけるかなしらへこそ

松風破夢

佐橋源凱庭

うちねふる枕の山にあらしきてやふれし夢の松の音

庭松

山本のゝ豊

よろつ代をかはらぬ色の庭の松千代もかはらぬ色そみえける

武井長昭

ひとり世にみさかえゆく庭の面の松の風にふくこゝろ

松影浮水

木村楚幹

谷川の水にうつれる影みえて底にもちよの松のみとりの

小佐野ゆき子

大井川入江にのこる老松はとしふりしのかげとうつして見ゆる

松積年　奥根孝興

庭の松よあまたの松のつもりしよふりしみやこの山かすみまで

松恩年　橘　尚照

いのちなかくて見る老ぬる大井川むかしも松にむかしみどりを

松樹千年　平原元道

久しきにたつる雲とかかりて千年もふりせぬ松の行末

松契千年　松兼賢

千とせしもまた一村深みどりなる葉にいくちよの世の松が枝

松不改色　藤経もはする

いつとても色かはらぬ松が枝はみゆるみどりやかはらぬ

○門松　明田演子

みかどの山霞もたつ門とつくる世をこめ松のみどりはさかえするかな

杜松　浅井芝月

見わたせば杜のこずゑも秋の色にかはりてみえぬ松の山もと

のかぎし秋ばかりに色なき杉もかはらぬ松のみどりかな

坂口宗弘

○梛

さらぬだに葉もかはらぬ月かげは緑も葉もてらされ

岸根孝純

○冬葉

むらむらに色かはりし枯枝もみえて葉のなかやまづ

大谷しける

○梨の花のあまる山ざくらの色ぞかはらぬ

大信寺寳山

あらのさとおもひけるのみちしるべとつもるのぞなかりける

日本政府圖書

国立公文書館
National Archives of Japan